

# 大学入学前後の生活変化が劣等感に及ぼす影響

栗 林 克 匡

# 大学入学前後の生活変化が劣等感に及ぼす影響

栗林 克 匡

Yoshimasa KURIBAYASHI

## 目次

- I. 問題
- II. 方法
- III. 結果
- IV. 考察
- 引用文献

## [Abstract]

### The Effects of Life Changes Before and After University Enrollment on Inferiority Feelings

This study examines the effects of life changes before and after university enrollment on inferiority feelings. A total of 104 university students were asked about (a) life changes before and after university enrollment, (b) experiences in college life, and (c) the scale of their inferiority feelings. Four types of life changes before and after enrollment were found by factor analysis: extension of interpersonal relationships, increased interest and motivation, consciousness about appearance, and an increase of freedom in daily activities. Students who broadened their interpersonal relations reduced their inferiority feelings regarding weakness in associating with the opposite sex, poor ability to make friends, and poor physical attractiveness. However, some daily activities such as part-time jobs, internships, job hunting, and volunteer activities did not affect their inferiority feelings.

## I. 問 題

劣等感は、容姿、体力、知的能力、性格、血筋、財産、社会的地位などの点で、自分が他者よりも劣っているという感情で、客観的に劣っているということよりも、主観的に劣っていると思込むことにより生じるとされている(櫻井, 1999)。高坂(2008)は劣等感尺度を作成し、青年期の学生を対象に調査を実施した。その結果、「異性とのつきあいの苦手さ」「学業成績の悪さ」「運動能力の低さ」「家庭水準の低さ」「性格の悪さ」「友達づくりの下手さ」「統率力の欠如」「身体的魅力のなさ」といった8つの劣等感を感じる側面が

見いだされた。その上で、彼は青年期における劣等感の発達的变化を検討している。中学生では「学業成績の悪さ」、高校生では「異性とのつきあいの苦手さ」「友達作りの下手さ」「身体的魅力のなさ」、大学生では「友達作りの下手さ」の劣等感が高かった。

大学生の劣等感に影響を及ぼす要因としてどのようなものがあるだろうか。これまでの研究で、パーソナリティ要因についての検討は行われている。例えば、安塚(1983)は、劣等感とYG性格検査との関連を検討しており、劣等感の高い者は、抑うつ性が高く、気分の変化が大きく、神経質、主観的、非協調的、非活動的、思考的内向、服従的、社会的

キーワード：劣等感, 対人関係, 大学生

Key words: Inferiority Feelings, Interpersonal Relationships, University Students

内向であった。高坂・佐藤(2008)は競争心を取り上げ、向上心なく自己アピールを求める誘示希求の強い者は劣等感が強いことを明らかとした。高坂・佐藤(2009)は、親和動機の中でも拒否不安の強い者は劣等感を強く感じ、親和傾向の強い者は劣等感をそれほど強く感じないということを明らかとした。個人の内的プロセスに関する要因に着目した研究も行われている。高坂(2008)は、青年期の劣等感の発達変化と自己の重要領域との関連について検討している。中・高・大学の各学校段階で重視する自己の領域が変化し、それに伴って感じる劣等感の種類に影響を及ぼすことを明らかとした。大学生では、自己承認を重要領域とすると「友達作りの下手さ」の劣等感を感じるが、人間的成熟を重要領域とすると劣等感あまり感じられなくなる。劣等感の生起には比較対象の違いといった要因も関わる。佐藤(2001)は、比較対象として自分自身(他者が抱く理想の自分・自分が抱く理想自己)・他者を分類しており、劣等感の3類型の提案を行っている。

このように様々な要因についての検討は行われているが、本研究では、高校生から大学生にかけての生活変化に注目する。同じ青年期であっても高校生と大学生とでは様々な生活環境に違いがあるといえよう。

まず学習面では、高校生まではクラス制で皆が同じ授業を受けるのに対し、大学生になると授業の選択の自由度が増し、同じ学科の友人であっても同じ授業科目を受けるとは限らない。学習時間も、高校生よりも大学生の方が少ないという調査結果もある(杉山・柴田, 1989)。高校では、特に進学校であれば、定期試験の点数や順位といった形で、他者との優劣が意識されやすいが、大学では、個人の成績は個別に示されるため、他者との優劣を意識しにくいといえよう。

対人関係の面では、大学では複数の学部・学科やサークル活動などで、多様な興味・能

力の人々と関わる機会が増える。また異性との交友の機会も増加すると考えられる。松井(1990)は、青年の社会化における友人関係の機能として3つ挙げている。まず「安定化の機能」で、友人は緊張を解消し不安を和らげる精神的安定に必要な存在で、悩みの相談を通して問題解消の一助となったり、遊びや一緒に活動を通してストレス発散や心理的ゆとりがもたらされたりする。次に「社会的スキルの学習」である。友人との接触には、身内のような甘えは許されず、接触する時間や空間的限定もある。その中で良好な関係を持つためには、社会的スキルを高めることが重要となる。そして「モデル機能」で、友人は、そうありたいと思う手本であり、自分の知らなかった生き方や考えを取り入れて、自己の人生観や価値観を拡張できる。対人関係を広げることができないことは、自己の成長の機会が少なく、劣等感へつながる可能性がある。

また外見(容姿)への関心も高まると考えられる。大学では、制服の着用の義務はなく、髪型や染毛、女性においては化粧なども自由に行うことができるようになる。外見と劣等感との関連について、島(1988)は高校生と大学生を対象に容貌の自己評価に関する調査を行い、高校生の41.2%、大学生の22.1%が自身の容貌を劣っていると評価していることを明らかにした。また落合(1989)は、大学生の顔に対する劣等感の検討を行っており、「やや強い」から「非常に強い」劣等感を持っている者は52%に達した。男子は歯並びの悪さ、女子は鼻・目・肌の劣等感を挙げた者が多かった。川名(2011)は大学生を対象に異性の対人魅力について調査を行い、「精神的魅力」「実利的魅力」「快樂的魅力」の3因子を見いだしている。このうち快樂的魅力は、身体的魅力、ハンサム(美しい)、セックスの相性などからなっている。外見のよさは異性の魅力の1つであり、異性交際へとつながる重要な要因といえよう。大学生の劣等感を

考える際に、外見に関わる変数は無視できないであろう。

その他、大学生固有の事情として、溝上(2001)は、サークル活動、アルバイト、就職、ボランティア活動、自由な生活設計、下宿や寮での一人暮らしなどを挙げている。学外での活動であるが、アルバイトはほとんどの学生が従事している活動であるし、ボランティア活動も現代においては重要な活動と認識されてきている。なお高校生でもアルバイトやボランティア活動を行う者もいるが、その活動への従事の仕方(時間配分の自由度など)は高校生と大学生とは異なっており、活動自体の意味合いも異なると考えられる。これら大学生固有の要因と劣等感との関連についても本研究では取り上げることとする。

本研究では、大学生の劣等感の生起要因について、高校時代と大学生である現在で生活面での様々な変化に注目し、それら変化と劣等感の関連について探索的に検討することを目的とする。生活の変化として、対人関係の変化、興味の変化、学習面での変化、生活活動の変化などを取り上げる。また劣等感として高坂(2008)の劣等感8因子(「異性とのつきあいの苦手さ」「学業成績の悪さ」「運動能力の低さ」「家庭水準の低さ」「性格の悪さ」「友達づくりの下手さ」「統率力の欠如」「身体的魅力のなさ」)を用いることとする。

## II. 方法

調査参加者：札幌市内の私立大学生2～4年生104名(男性29名、女性75名)。平均年齢は19.94歳(SD=.89)であった。

調査時期：2013年9月実施。

質問紙の構成：

1. 参加者の基本的属性：調査対象者の所属学科、学年、年齢、性別、実家の場所を「1. 札幌市内、2. 北海道内、3. 北海道外」の三択で回答させた。

2. 大学生生活での経験の有無：劣等感との関連を検討するために、以下の11の諸経験の有無について2件法で尋ねた。①恋人の有無、②サークルや部活動への所属、③合同コンパへの参加経験、④髪を染めた経験、⑤運転免許の有無(二輪、四輪問わず)、⑥アルバイト経験、⑦就職活動の経験、⑧インターンシップや教育実習の経験、⑨ボランティアの経験、⑩第一志望の学校か、⑪実家暮らしか。

### 3. 大学入学前後の生活変化

高校生から大学生である現在にかけての生活における対人関係の変化、興味の変化、学習面での変化、生活活動の変化などといった環境的・心理的变化について独自に18項目を作成し、7段階(1. 非常に減った～7. 非常に増えた)で回答させた。

### 4. 劣等感

高坂(2008)の作成した劣等感尺度の8因子から、それぞれ因子負荷量の高い順に3項目ずつ、計24項目を選んだ。この質問項目は、「○○(である)自分が人と比べて劣っている」という表記になっている。具体的には、異性との付き合いの苦手さ因子(以下、異性劣等感と表記)は、「異性とのつきあいが苦手な」「異性にうまく声をかけられない」「異性と仲良くなれない」、学業成績の悪さ因子(以下、学業劣等感)は、「成績が悪い」「頭がよくない」「学力が低い」の3項目、運動能力の低さ因子(以下、運動劣等感)は、「運動神経が鈍い」「運動オンチな」「運動がなかなかうまくならない」、家庭水準の低さ因子(以下、家庭劣等感)は、「親の学歴がよくない」「家があまり裕福でない」「親が立派でない」、性格の悪さ因子(以下、性格劣等感)は、「人のせいにしてしまう」「悪口を言ってしまう」「いじわるな」、友達づくりの下手さ因子(以下、友達劣等感)は、「友達づきあいが下手な」「友達グループにうまく入れない」「うまく友人と話せない」、統率力の

欠如因子（以下、統率劣等感）は、「人に指示が出せない」「リーダーシップがない」「グループをまとめられない」、身体的魅力のなさ因子（以下、外見劣等感）は、「かっこよくない（かわいくない）」「スタイルがよくない」「顔が丸い（細い）」の各3項目を用いた。

これらについて、自分が高校生だったとき（本研究では未使用）と、大学生となった現在の自分がそれぞれの程度劣等感を感じていたか、5段階（1. まったく感じない～5. とても感じる）で回答させた。

### Ⅲ. 結 果

#### 1. 大学入学前後の生活変化の因子分析

大学入学前後の生活変化18項目について、主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の推移から4因子解を採用した。各因子を構成する項目から、それぞれ「対人関係の広がり」「興味・意欲の増大」

「外見への関心」「生活活動の自由度の増大」と命名した（表1）。各因子に.40以上の負荷をする項目を加算後項目数で除した得点を以下の分析に用いた。

#### 2. 生活変化と劣等感との関係

生活変化4因子と高坂（2008）の結果に基づく劣等感8因子とのピアソンの積率相関係数を算出した（表2）。なお劣等感得点は現在（大学時）の回答について各因子3項目の平均得点を用いた。分析の結果、対人関係の広がり「異性劣等感（ $r = -.34, p < .001$ ）」「友人劣等感（ $r = -.28, p < .01$ ）」「外見劣等感（ $r = -.27, p < .01$ ）」と有意な負の相関が見られた。大学生になって生活活動の自由度が増大した者は、「異性劣等感（ $r = -.32, p < .01$ ）」「家庭劣等感（ $r = -.27, p < .01$ ）」を減らしている。外見への関心は「友人劣等感（ $r = .23, p < .05$ ）」「統率劣等感（ $r = .21, p < .05$ ）」「外見劣等感（ $r = .21, p < .05$ ）」を高めていた。

表1 大学入学前後の生活変化の因子分析結果（主因子法プロマックス回転）

	I	II	III	IV
1. 友人の数	.810	-.202	.093	-.210
2. 異性の友人の数	.750	-.018	-.087	-.007
4. 多くの人と関わる機会	.515	.225	-.012	.060
14. 積極的に行動すること	.510	.277	-.124	.111
3. 背景が自分と異なる人物との付き合い	.343	.136	.097	.106
15. まじめに取り組むこと	-.026	.775	-.126	-.198
17. 様々なことに興味を持つ	.061	.731	-.037	.069
18. 相手の気持ちを考えて行動	.040	.409	.168	.020
16. ささいなことで不安になる	-.233	.396	.270	.054
12. 勉強する時間	.066	.376	.077	-.127
7. 外見をよくする努力	.050	.039	.875	-.055
6. 外見を気にすること	-.053	-.042	.773	.071
13. 授業が難しいと感じること	-.056	-.134	.153	-.089
11. 活動する範囲	.169	.066	.076	.639
10. お金をよく使う	.147	-.226	.027	.633
9. 生活が不規則になること	-.272	.001	-.036	.573
8. 自由に使える時間	-.109	-.151	-.239	.373
5. サイトの活用頻度	.049	.038	.150	.290
固有値	3.11	1.83	1.23	0.91
累積寄与率 (%)	17.29	27.45	34.28	39.33
因子間相関				
I. 対人関係の広がり ( $\alpha = .74$ )		.34	-.01	.31
II. 興味・意欲の増大 ( $\alpha = .65$ )			.22	.33
III. 外見への関心 ( $\alpha = .83$ )				.28
IV. 生活活動の自由度の増大 ( $\alpha = .61$ )				

表2 大学入学前後の生活変化と劣等感との相関

	対人関係拡張	興味意欲増大	外見関心	自由度増大
異性劣等感	-.34***	-.08	.10	-.32**
学業劣等感	-.07	-.03	.05	-.02
運動劣等感	-.06	.09	.13	-.02
家庭劣等感	-.12	-.04	-.16	-.27**
性格劣等感	-.05	.13	.06	-.09
友人劣等感	-.28**	-.04	.23*	-.17
統率劣等感	-.09	.02	.21*	.04
外見劣等感	-.27**	-.02	.21*	.02

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

### 3. 大学生活での諸経験が生活変化と劣等感に及ぼす影響

大学生活での諸経験および性別が、生活変化と劣等感に及ぼす影響を検討するために、それぞれを要因とする t 検定を実施した。

#### ①恋人の有無

本研究の参加者で恋人がいる者は3割程度であった。恋人がいる者はいない者と比べて、生活活動の自由度が増加しており ( $t(101) = 2.01, p < .05$ )、異性 ( $t(102) = 2.15, p < .05$ )・性格 ( $t(101) = 2.66, p < .01$ )・友人 ( $t(102) = 2.43, p < .05$ )・統率 ( $t(102) = 2.19, p < .05$ )・外見 ( $t(51.72) = 2.88, p < .01$ ) の劣等感 は低かった (表3)。

#### ②サークルや部活動への所属

本研究の参加者でサークル所属している者は8割弱であった。サークルに所属している

表3 恋人の有無別の大学入学前後の生活変化と劣等感の平均値・SD・t 値

	恋人あり (N = 33)	恋人なし (N = 71)	t 値
対人関係拡張	4.98 (1.19)	4.77 (0.88)	1.01
意欲増大	4.80 (1.08)	4.88 (0.75)	0.44
外見関心	5.18 (0.94)	5.54 (0.83)	1.93
自由度増大	6.14 (0.77)	5.85 (0.65)	2.01*
大学異性劣等感	2.35 (1.11)	2.88 (1.20)	2.15*
大学学業劣等感	2.76 (1.23)	3.04 (1.15)	1.13
大学運動劣等感	2.44 (1.06)	2.72 (1.20)	1.15
大学家庭劣等感	1.66 (0.80)	1.70 (0.76)	0.29
大学性格劣等感	2.45 (0.93)	2.96 (0.89)	2.66**
大学友人劣等感	2.54 (1.13)	3.10 (1.10)	2.43*
大学統率劣等感	2.56 (1.04)	3.08 (1.16)	2.19*
大学外見劣等感	2.95 (1.05)	3.55 (0.84)	2.88**

※( )内はSD \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

表4 サークル所属の有無別の大学入学前後の生活変化と劣等感の平均値・SD・t 値

	サークル所属 (N = 81)	所属なし (N = 23)	t 値
対人関係拡張	5.07 (0.87)	4.00 (0.93)	5.13***
意欲増大	4.90 (0.85)	4.70 (0.91)	0.98
外見関心	5.32 (0.88)	5.78 (0.80)	2.26*
自由度増大	5.99 (0.70)	5.77 (0.71)	1.35
大学異性劣等感	2.59 (1.19)	3.14 (1.12)	1.99*
大学学業劣等感	2.86 (1.18)	3.25 (1.14)	1.38
大学運動劣等感	2.55 (1.17)	2.91 (1.09)	1.32
大学家庭劣等感	1.58 (0.69)	2.06 (0.91)	2.31*
大学性格劣等感	2.74 (0.96)	3.00 (0.80)	1.18
大学友人劣等感	2.78 (1.14)	3.42 (0.99)	2.43*
大学統率劣等感	2.77 (1.16)	3.41 (0.98)	2.40*
大学外見劣等感	3.26 (0.98)	3.72 (0.76)	2.13*

※( )内はSD \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

表5 合コンへの参加経験の有無別の大学入学前後の生活変化と劣等感の平均値・SD・t 値

	合コン経験あり (N = 23)	合コン経験なし (N = 81)	t 値
対人関係拡張	4.68 (1.28)	4.88 (0.89)	0.67
意欲増大	4.97 (0.99)	4.82 (0.83)	0.74
外見関心	5.52 (0.96)	5.40 (0.86)	0.61
自由度増大	6.28 (0.74)	5.85 (0.67)	2.65**
大学異性劣等感	2.39 (1.24)	2.81 (1.17)	1.48
大学学業劣等感	2.87 (1.32)	2.97 (1.14)	0.36
大学運動劣等感	2.81 (1.19)	2.58 (1.15)	0.84
大学家庭劣等感	1.68 (0.81)	1.69 (0.76)	0.06
大学性格劣等感	2.83 (0.83)	2.79 (0.96)	0.19
大学友人劣等感	2.74 (1.19)	2.98 (1.12)	0.88
大学統率劣等感	2.78 (1.26)	2.95 (1.12)	0.60
大学外見劣等感	3.42 (1.01)	3.34 (0.94)	0.35

※( )内はSD \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

者はしていない者に比べて、外見への関心の増加量は少なく ( $t(102) = 2.26, p < .05$ )、対人関係が拡張しており ( $t(102) = 5.13, p < .001$ )、異性 ( $t(102) = 1.99, p < .05$ )・家庭 ( $t(29.54) = 2.31, p < .05$ )・友人 ( $t(102)$

=2.43,  $p < .05$  )・統率 ( $t(102) = 2.40, p < .05$ )・外見 ( $t(102) = 2.13, p < .05$ ) の劣等感は低かった(表4)。

③合同コンパへの参加経験

大学生が異性と出会う場として合同コンパがあるが、参加経験のある者は2割程度であった。経験のある者はない者よりも、生活活動の自由度が増大しているものの ( $t(102) = 2.65, p < .01$ )、劣等感に差は見られなかった(表5)。

④髪を染めた経験

本研究の参加者で染毛経験がある者は7割を超えていた。染毛経験のある者とないと生活変化および劣等感に差は見られなかった(表6)。

⑤運転免許の有無(二輪, 四輪問わず)

本研究の参加者で免許のある者は約半数であった。運転免許のある者はない者と比べて、学業 ( $t(102) = 2.42, p < .05$ ) の劣等感が低かった(表7)。

⑥アルバイト経験

本研究の大学生のアルバイト経験は9割以上の者が経験しているが、経験者と未経験者として生活変化および劣等感に差は見られなかった(表8)。

⑦就職活動の経験

本研究の参加者の多くは2~3年生で就職経験がない者が9割を占めた。就職経験ある

表6 染毛経験の有無別の大学入学前後の生活変化と劣等感の平均値・SD・t値

	染毛あり (N = 77)		染毛なし (N = 27)		t 値
対人関係拡張	4.80	(1.00)	4.94	(0.94)	0.67
意欲増大	4.85	(0.88)	4.86	(0.84)	0.08
外見関心	5.45	(0.92)	5.35	(0.78)	0.49
自由度増大	6.02	(0.71)	5.72	(0.65)	1.97
大学異性劣等感	2.70	(1.20)	2.77	(1.20)	0.26
大学学業劣等感	2.95	(1.20)	2.95	(1.13)	0.01
大学運動劣等感	2.69	(1.15)	2.47	(1.18)	0.86
大学家庭劣等感	1.75	(0.81)	1.52	(0.62)	1.53
大学性格劣等感	2.84	(0.88)	2.69	(1.08)	0.70
大学友人劣等感	2.99	(1.12)	2.74	(1.18)	0.97
大学統率劣等感	2.83	(1.09)	3.15	(1.29)	1.26
大学外見劣等感	3.44	(0.92)	3.14	(1.01)	1.43

※( )内はSD \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

表7 運転免許の有無別の大学入学前後の生活変化と劣等感の平均値・SD・t値

	運転免許あり (N = 49)		運転免許なし (N = 55)		t 値
対人関係拡張	5.02	(1.08)	4.67	(0.88)	1.84
意欲増大	4.77	(0.94)	4.93	(0.80)	0.93
外見関心	5.32	(0.80)	5.52	(0.95)	1.17
自由度増大	5.97	(0.74)	5.92	(0.68)	0.33
大学異性劣等感	2.52	(1.23)	2.89	(1.14)	1.61
大学学業劣等感	2.66	(1.10)	3.21	(1.19)	2.42*
大学運動劣等感	2.64	(1.15)	2.63	(1.18)	0.05
大学家庭劣等感	1.66	(0.74)	1.72	(0.80)	0.37
大学性格劣等感	2.72	(0.96)	2.87	(0.91)	0.81
大学友人劣等感	2.69	(1.18)	3.13	(1.07)	1.97
大学統率劣等感	2.69	(1.12)	3.11	(1.14)	1.90
大学外見劣等感	3.22	(0.84)	3.48	(1.03)	1.37

※( )内はSD \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

表8 アルバイト経験の有無別の大学入学前後の生活変化と劣等感の平均値・SD・t値

	バイト経験あり (N = 95)		バイト経験なし (N = 9)		t 値
対人関係拡張	4.85	(0.98)	4.67	(1.10)	0.53
意欲増大	4.85	(0.89)	4.89	(0.60)	0.13
外見関心	5.44	(0.90)	5.22	(0.67)	0.71
自由度増大	5.98	(0.68)	5.52	(0.84)	1.91
大学異性劣等感	2.69	(1.21)	3.00	(0.94)	0.75
大学学業劣等感	2.96	(1.18)	2.81	(1.21)	0.36
大学運動劣等感	2.65	(1.18)	2.44	(0.91)	0.51
大学家庭劣等感	1.71	(0.78)	1.44	(0.65)	1.00
大学性格劣等感	2.82	(0.95)	2.59	(0.74)	0.70
大学友人劣等感	2.90	(1.15)	3.19	(0.97)	0.72
大学統率劣等感	2.93	(1.18)	2.74	(0.78)	0.46
大学外見劣等感	3.33	(0.97)	3.70	(0.54)	1.84

※( )内はSD \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

表9 就職活動の経験の有無別の大学入学前後の生活変化と劣等感の平均値・SD・t値

	就職活動あり (N = 9)		就職活動なし (N = 95)		t 値
対人関係拡張	5.25	(0.83)	4.79	(1.00)	1.33
意欲増大	4.96	(0.90)	4.84	(0.87)	0.40
外見関心	5.06	(0.85)	5.46	(0.88)	1.32
自由度増大	6.15	(0.58)	5.92	(0.71)	0.92
大学異性劣等感	2.52	(1.33)	2.73	(1.18)	0.52
大学学業劣等感	3.00	(1.31)	2.94	(1.17)	0.14
大学運動劣等感	2.81	(1.29)	2.62	(1.15)	0.49
大学家庭劣等感	1.63	(0.56)	1.69	(0.79)	0.24
大学性格劣等感	2.89	(0.87)	2.79	(0.94)	0.30
大学友人劣等感	2.63	(1.23)	2.95	(1.13)	0.81
大学統率劣等感	2.85	(1.32)	2.92	(1.14)	0.16
大学外見劣等感	3.37	(0.81)	3.36	(0.97)	0.04

※( )内はSD \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

者とないと生活変化および劣等感に差は見られなかった(表9)。

⑧インターンシップや教育実習の経験

大学卒業後に就職を考えている者にとって、事前に職業体験をすることは、就業意識を高めると考えられる。本研究の参加者で経験の

ある者は2割程度で、生活変化や劣等感を経験なしの者と差はなかった(表10)。

⑨ボランティアの経験

本研究の参加者でボランティアの経験がある者は6割程度であった。ボランティア経験は、社会との関わりや自己成長と関わり深い活動であるが、生活変化および劣等感について経験の有無で差は見られなかった(表11)。

⑩第一志望の学校か

入学した大学が第一志望であったかどうかは、学業意欲に関連すると思われる。本研究の参加者の7割は第一志望の大学であった。第一志望校であった者はそうでない者と比べて、性格( $t(102) = 2.05, p < .05$ )についての劣等感が高かった(表12)。

表10 インターン・教育実習の経験の有無別の大学入学前後の生活変化と劣等感の平均値・SD・t値

	職業実習あり (N=24)	職業実習なし (N=80)	t値
対人関係拡張	5.18 (1.15)	4.73 (0.91)	1.97
意欲増大	5.10 (1.15)	4.78 (0.75)	1.59
外見関心	5.19 (0.88)	5.49 (0.87)	1.50
自由度増大	6.14 (0.64)	5.88 (0.72)	1.58
大学異性劣等感	2.40 (1.20)	2.81 (1.18)	1.47
大学学業劣等感	2.89 (1.27)	2.97 (1.16)	0.28
大学運動劣等感	2.64 (1.08)	2.63 (1.19)	0.02
大学家庭劣等感	1.76 (0.80)	1.67 (0.76)	0.54
大学性格劣等感	2.93 (0.96)	2.76 (0.92)	0.79
大学友人劣等感	2.76 (1.10)	2.97 (1.15)	0.78
大学統率劣等感	2.82 (1.16)	2.94 (1.15)	0.44
大学外見劣等感	3.25 (1.05)	3.39 (0.92)	0.64

※( )内はSD \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

表11 ボランティアの経験の有無別の大学入学前後の生活変化と劣等感の平均値・SD・t値

	ボランティアあり (N=63)	ボランティアなし (N=41)	t値
対人関係拡張	4.89 (0.96)	4.75 (1.04)	0.70
意欲増大	4.94 (0.85)	4.72 (0.88)	1.31
外見関心	5.33 (0.86)	5.57 (0.90)	1.41
自由度増大	5.89 (0.74)	6.02 (0.64)	0.86
大学異性劣等感	2.70 (1.22)	2.73 (1.15)	0.12
大学学業劣等感	2.93 (1.20)	2.98 (1.15)	0.24
大学運動劣等感	2.56 (1.11)	2.74 (1.23)	0.75
大学家庭劣等感	1.74 (0.77)	1.62 (0.76)	0.76
大学性格劣等感	2.77 (0.96)	2.84 (0.90)	0.34
大学友人劣等感	2.89 (1.14)	2.97 (1.14)	0.32
大学統率劣等感	2.92 (1.15)	2.90 (1.16)	0.06
大学外見劣等感	3.35 (0.93)	3.37 (0.99)	0.06

※( )内はSD \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

表12 第1志望校かどうか別の大学入学前後の生活変化と劣等感の平均値・SD・t値

	第1志望校 (N=74)	それ以外 (N=30)	t値
対人関係拡張	4.83 (0.94)	4.83 (1.11)	0.01
意欲増大	4.77 (0.85)	5.04 (0.90)	1.45
外見関心	5.44 (0.90)	5.38 (0.86)	0.29
自由度増大	5.92 (0.71)	6.00 (0.69)	0.54
大学異性劣等感	2.84 (1.20)	2.40 (1.14)	1.73
大学学業劣等感	2.91 (1.16)	3.03 (1.23)	0.47
大学運動劣等感	2.58 (1.12)	2.77 (1.25)	0.75
大学家庭劣等感	1.69 (0.78)	1.69 (0.75)	0.00
大学性格劣等感	2.92 (0.95)	2.51 (0.83)	2.05*
大学友人劣等感	3.04 (1.11)	2.64 (1.18)	1.60
大学統率劣等感	2.98 (1.13)	2.73 (1.18)	1.00
大学外見劣等感	3.45 (0.92)	3.13 (0.99)	1.55

※( )内はSD \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

表13 実家暮らしの有無別の大学入学前後の生活変化と劣等感の平均値・SD・t値

	実家暮らし (N=76)	1人暮らし (N=28)	t値
対人関係拡張	4.85 (1.03)	4.79 (0.86)	0.25
意欲増大	4.93 (0.87)	4.64 (0.83)	1.51
外見関心	5.44 (0.88)	5.38 (0.90)	0.34
自由度増大	5.93 (0.71)	5.96 (0.69)	0.20
大学異性劣等感	2.72 (1.17)	2.70 (1.27)	0.06
大学学業劣等感	2.99 (1.09)	2.85 (1.41)	0.54
大学運動劣等感	2.68 (1.20)	2.52 (1.06)	0.59
大学家庭劣等感	1.69 (0.76)	1.69 (0.79)	0.01
大学性格劣等感	2.76 (0.92)	2.89 (0.97)	0.62
大学友人劣等感	2.91 (1.10)	2.95 (1.25)	0.16
大学統率劣等感	2.93 (1.13)	2.85 (1.22)	0.35
大学外見劣等感	3.30 (0.93)	3.52 (0.99)	1.08

※( )内はSD \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

表14 性別の大学入学前後の生活変化と劣等感の平均値・SD・t値

	男性 (N=29)	女性 (N=75)	t値
対人関係拡張	5.39 (0.75)	4.62 (0.99)	3.78***
意欲増大	4.90 (0.92)	4.84 (0.85)	0.32
外見関心	5.07 (0.93)	5.56 (0.83)	2.62*
自由度増大	6.06 (0.80)	5.90 (0.66)	1.04
大学異性劣等感	2.20 (1.14)	2.92 (1.16)	2.86**
大学学業劣等感	2.71 (1.18)	3.04 (1.17)	1.28
大学運動劣等感	2.39 (1.19)	2.73 (1.14)	1.30
大学家庭劣等感	1.57 (0.61)	1.73 (0.82)	1.07
大学性格劣等感	2.41 (0.91)	2.95 (0.90)	2.71**
大学友人劣等感	2.29 (1.00)	3.17 (1.10)	3.77***
大学統率劣等感	2.48 (1.19)	3.08 (1.10)	2.42*
大学外見劣等感	2.74 (0.87)	3.60 (0.87)	4.54***

※( )内はSD \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

⑪実家暮らしか

本研究の参加者で実家暮らしは7割を越えていた。実家暮らしか1人暮らしかによって生活変化や劣等感に差は見られなかった(表13)。



## ⑫性差の検討

生活変化と劣等感に性差があるのかという基本情報を得るためにt検定を行った。その結果、男性は女性に比べて外見への関心の増加量は少なく ( $t(102) = 2.62, p < .05$ ), 対人関係は拡張しており ( $t(102) = 3.78, p < .001$ ), 異性 ( $t(102) = 2.86, p < .01$ )・性格 ( $t(101) = 2.71, p < .01$ )・友人 ( $t(102) = 3.77, p < .001$ )・統率 ( $t(102) = 2.42, p < .05$ )・外見 ( $t(102) = 4.54, p < .001$ )の劣等感は低かった(表14)。

## IV. 考 察

高校生から大学生である現在にかけての生活における環境的・心理的变化について因子分析の結果、「対人関係の広がり」「興味・意欲の増大」「外見への関心」「生活活動の自由度の増大」の4因子が見いだされた。これらと高坂(2008)の劣等感8因子との関連を見たところ、対人関係の広がり「異性劣等感」「友人劣等感」「外見劣等感」と有意な負の相関が見られた。大学生は友達づくりの下手さの劣等感を感じやすいが(高坂, 2008), これは高校から大学にかけて友達や異性づきあいの量が実際に減っている者に顕著に見られるといえよう。他者との付き合いを拡張させた者は、逆に劣等感を減らすことにつながっているようである。大学生になって生活活動の自由度が増大した者は、「異性劣等感」「家庭劣等感」を減らしている。自由度が増すに伴い、自律性を身につけることが必要となってくるが、このことが異性への積極さや親からの独立心を高め、劣等感を小さくしたのであろう。外見への関心は「友人劣等感」「統率劣等感」「外見劣等感」を高めていた。大学生は高校生と異なり制服から私服となり、化粧も自由に行えるようになるが、それに伴い周囲の友人との社会的比較(Festinger, 1954)が生じ、自己評価を下げるが多くなるのかもしれない。

大学生活での諸経験および性別が、生活変化と劣等感に及ぼす影響についても検討した。恋人の有無については、恋人のいる者は、高校時代に比べ生活の自由度が拡張していた。恋人のいない者は、特に他者との関わりに関する劣等感が大きかった。神菌・黒川・坂田(1996)は、現在恋愛関係にある者はない者よりも自尊心と充実感が高く、抑鬱が低いことを明らかにしており、肯定的な側面の促進に伴い、劣等感のような否定側面が抑制されるのであろう。

サークルに所属している者は、対人関係が拡張していた。サークルに所属していない者は、外見への関心が高く、他者との関わりに関する側面で劣等感が大きかった。大学のサークル活動は規模が大きくなり、対人関係が広がる。大学では様々な社会集団の中から自らにふさわしいものを主体的に選択し、その社会の一員となるべき積極的な態度が求められる(堀井, 2002)。集団への所属がない者は、心理的安定を得ることができず、劣等感を感じやすくなるのであろう。

合同コンパの参加経験者は、生活自由度が増しているものの、劣等感参加経験がない者と差はなかった。異性劣等感については、参加経験の影響も考えられたが、合同コンパに参加をしても必ずしも異性と交際が始まるわけではないことから、劣等感を有意に下げるには至らなかったと思われる。

染毛経験は、外見に関わる変数との関連が考えられたが、外見への関心の増加や外見劣等感で、染毛経験の有無の差は見られなかった。今回、大学生での染毛経験のある者は7割に達し、決して特別な行為とはいええない。高校時代に、校則など制約があるにも関わらずあえて染毛する個人については、例えば独自性欲求が強いなどの個人差があり、劣等感との関連が何かあるかもしれない。

運転免許のない者は、特に学業成績の劣等感が大きかった。運転免許は、技能試験と学

科試験を経て取得できるが、取得者は一定の能力が認められたことになる。このことが知的側面での劣等感を減ずるのであろう。

アルバイト経験については、明確な劣等感との関連は見られなかった。ただし、本当に無関連なのかどうかはもう少し詳細に検討する必要があるかもしれない。例えば、アルバイトを通して、様々な人に出会い成長を実感できれば、劣等感は減少するだろうが、アルバイトで失敗や人間関係トラブルを経験することが多ければ劣等感は増加すると考えられる。今回の参加者は9割以上がアルバイトの経験があったことから、その両者のパターンが混在しているとも考えられる。

就職活動経験の有無も生活変化や劣等感と明確な関連は見られなかった。これも、活動の経験そのものよりも、活動の成否（内定を獲得できたか）の影響の方が、劣等感と関連すると思われる。

インターンや教育実習は、大学生が経験しうる特別なイベントであるが、これら職業実習の経験の有無についても生活変化や劣等感とは関連が明確には見られなかった。経験者の中でも、こういったイベントに、主体的に参加した人と、義務的に参加した人とで劣等感への影響の違いがあるのかもしれない。この点は、今後の検討が必要であろう。

妹尾・高木(2003)は、ボランティア活動が、ボランティア参加者自身に与える効果について検討を行っている。ボランティア参加者は、援助成果（「愛他的精神の高揚」「人間関係の広がり」「人生への意欲喚起」）を高く見積もることが示されている。このことから、劣等感の減少につながることも考えられたが、ボランティア経験の有無は生活変化や劣等感とは関連が明確には見られなかった。ボランティア活動の実態（活動内容や参加時間など）も考慮して検討を行う必要があるかもしれない。

第一志望校でなかった者の方が、性格劣等感は小さかった。この要因は特に学業劣等感

との関連が考えられたが、こちらは見られなかった。性格劣等感の結果の出方については、意外にも思える。第一志望校でないということは、事情によりやむを得なく入学した者といえよう。そのような中で大学に適応していくために、「悪口を言ったり」「人のせいにする」とすることなく前向きに生きることを選択した者が多かったのかもしれない。

大学生になると実家を離れて暮らす者も出てくるが、実家暮らしかどうかは生活変化や劣等感とは関連が明確には見られなかった。実家暮らしの者であっても、大学生ともなると家族との関わりよりも友人や社会との関わりが拡大し、その点では一人暮らしの者と大差ないと思われる。

性差については、男性の方が対人関係の拡張しており、女性の方が、外見への関心が増しており、また異性・性格・友人・統率・外見の劣等感が高かった。友人・外見劣等感については、高坂（2008）と同様の結果であった。今回の調査参加者の86.5%が社会福祉学部の所属であったが、ここは女性の割合が多い学部であった。学部内での異性との出会いや交友という点では、男子学生は機会が多いが、女性学生は少ないといえよう。このような事情が、いくつかの劣等感因子に影響した可能性はあるだろう。

本研究では、大学生の劣等感に及ぼす要因として、大学生に特有の諸要因を取り上げた。特に、恋人の有無やサークル活動への参加など、異性を含む様々な他者との継続的な交流の機会があるかどうか、いくつかの劣等感の側面へ影響をすることが確認できた。劣等感の因子の中で、「学業劣等感」「運動劣等感」については影響を及ぼす要因はなかった。これらは大学生にとっては重要でない領域であることがその理由かもしれないが、今回取り上げなかった要因（大学のランク、学部の違いなど）の影響は未知である。今後の検討が必要であろう。

〔付記〕

本研究の実施にあたり、西岡あゆみさんの協力を得ました。記して感謝いたします。

本研究の一部は、日本心理学会第78回大会で発表された。

〔引用文献〕

- Festinger, L. (1954). A Theory of social comparison process. *Human Relations*, 7, 117-140.
- 堀井俊章 (2002). 青年期における対人不安意識の発達的变化(続報) 山形大学紀要(教育科学), 13 (1), 79-94.
- 神薊紀幸・黒川正流・坂田桐子 (1996). 青年の恋愛関係と自己概念及び精神的健康の関連 広島大学総合科学部紀要Ⅳ理系編, 第22巻, 93-104.
- 川名好裕 (2011). 関係性の違いによる異性の対人魅力 立正大学心理学研究年報 (2), 1-8.
- 高坂康雅 (2008). 自己の重要領域からみた青年期における劣等感の発達的变化 教育心理学研究, 56, 218-229.
- 高坂康雅・佐藤有耕 (2008). 青年期における劣等感と競争心との関連 筑波大学心理学研究, 35, 41-48.
- 高坂康雅・佐藤有耕 (2009). 青年期における劣等感の規定因モデルの構築 筑波大学心理学研究, 37, 77-86.
- 松井 豊 (1990). 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫(編著) 社会の心理学ハンドブック ナカニシヤ出版 Pp.283-296.
- 溝上真一 (2001). 自己評価を規定する自己とそれに関連する大学生的文脈 溝上慎一(編) 大学生の自己と生き方-大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学- ナカニシヤ出版 Pp.69-96.
- 落合良行 (1989). 青年期にみられる顔に対する劣等感の分析 日本教育心理学会総会発表論文集 (31), 224.
- 櫻井茂男 (1999). 劣等感 中嶋義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司(編) 心理学辞典 有斐閣
- 佐藤陽子 (2001). 現代青年の劣等感に関する研究: 比較対象と比較基準について 日本青年心理学会大会発表論文集 (9), 39-40.
- 妹尾香織・高木 修 (2003). 援助行動経験が援

助者自身に与える効果: 地域で活動するボランティアに見られる援助成果 社会心理学研究, 18 (2), 106-118.

島 久洋 (1988). 青年の容姿と適応感 青年心理学研究, 2, 12-25.

杉山憲司・柴田真人 (1989). 大学生・浪人生・高校生の学習実態と学習観の比較 東洋大学児童相談研究, 8, 13-27.

安塚俊行 (1983). 劣等感の構造 (2) -YG性格検査の分析- 幾徳工業大学研究報告 A 人文社会科学編, 7, 53-58.